

# 道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会  
 事務局 〒004-0006 北海道厚別区厚別町小野幌53-2  
 北海道開拓記念館内  
 電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

## 平成10年度北海道博物館協会 ミュージアム・マネージメント研修会 — 概要報告 —

平成10年度北海道博物館協会ミュージアム・マネージメント研修会を、「博物館とバリアフリー」と題し、10月27日、北網圏北見文化センターを会場として開催しました。全道から63名の参加者を迎えたこの研修会では、講演2題とそれらを受けての質疑応答を行いました。今回は、2題の講演を概要で報告します。

### ■講演1 「車椅子から見た街と施設」 北海道身体障害者相談員 永山 衛氏

私自身、旅行をしますと、ホテルの次に必ずその土地の博物館、もしくは郷土資料館などを一番先に訪ねます。私にとっては博物館とか郷土資料館が、観光地をめぐる以前のガイドマップだと解釈しています。

私はバリアフリーとか、ノーマライゼーションとかそれから障害者にとって優しい建物作りとか、そのような言い方をする中でバリアフリーの考え方は、特定の人への配慮と言う考えをまず捨ててほしいと思っています。10年ほど前は、車椅子用のトイレには、車椅子用のマークだけを貼っていたんです。ところがここ2、3年のうちに、車椅子用のトイレには、老人はもちろん、お子様を連れだご婦人も使ってかまわないと言う表示に変わってきています。障害を持つ人達は、実は今現在健康でいる皆さんの将来の姿だと、ただそれが病気で起きるか怪我で起きるか、老化という時代の流れの中で起きるかは別にして誰もが歩く事に、物を持つ事に、見る事に、聞く事に不自由さを感じてくる。そのような人に向けての対応がバリアフリーだと考えています。例えばスキーで足を折っ

た。ちょうどその時博物館もしくは公民館で催しものがある。行きたいけれども段差があるために車椅子では行くことが出来ない。突然に起こる一過性の事故に対応する事もできないのがバリアフリー化していない施設なのです。このような意味で考えていただくと全ての人々に対応できるのではないかと思います。ですから、障害者にやさしい施設づくりは、全ての人々にとってのやさしい施設づくりではないかと思います。

斜里町立の夢ホールのパンフレットには、実は一番正面に障害者トイレが写真に載っています。一般に、公共施設等のパンフレットやリフレットには、車椅子用トイレはなかなか載っていません。知床自然センターでも、やはり車椅子用のトイレがリフレットに載っています。これはどういうことかといいますと、車椅子用のトイレが写真に載っていることが、全てバリアフリー化されてますよ、と言う意志表示なのです。普通、女性が施設の展示物と一緒に案内をしている写真がほとんどですが、私はこれからは、こういう形が理想になってくるのではないかと思います。

障害者手帳の交付者数の内、18才以上の増加が非常に増えてきています。この内ほとんどが、高齢者で平均障害と視力障害、それに肢体不自由です。さらに、世の中には手帳を交付されていないが、身体のどこかに障害を持った人達がたくさんいます。ですからこれからの公共施設というのは、健康な者よりもどこかに障害を持った人達が訪れて来る場所だと認識をしてほしいと思います。バリアフリーは、見るからに身体の不自由な人が来た時だけの為ではないのです。

施設のバリアフリー化には費用がかかるから、何年後に建て直しの計画があるので今は我慢しているということがあります。バリアフリーとは、



新設をして車椅子用のトイレを取り付け、建物を全てフラット化することだけがバリアフリーでないと思います。

障害者が求めているバリアフリーの基本はまず利用しやすいことです。特別養護老人ホーム等は、保護をするために完全化されたバリアフリー化がなされなければならない。ところが博物館等の文化施設では、100%のバリアフリー化は非常に難しいのではないかと考えています。なぜなら、生涯学習施設である博物館にはさまざまな障害を持った人達が訪れてくるからです。例えば手すり一つ付けるにしてもその障害の違いによって、手すりの数がものすごく増えてくるのではないのでしょうか。ですから情報を分析して自分の施設に合うバリアフリー化を選択する必要があると思います。この情報をどこで集めるかといいますと、完成されていない施設で集めるしかありません。古い建造物を利用している公共施設がたくさんありますが、その中でバリアフリーを考えると、手すりの面、階段、段差の面、トイレの面等、昔の建物ですから全てがどうしても福祉的ではない。そこでどうやって模索するかが新しい施設を作るときの資料になるのではないのでしょうか。

バリアフリーの中で一番大切な部分は、バリアフリーにランク付けはないということです。車椅子用の対応がなっていないとか、スロープが無いとか、そういったことは車椅子に乗ってる者にとって些細な事なのです。なぜなら行く場所によって対応がなっていないだろうと解かって行く事が多いからです。何か魅力があるからその部分を乗り越えてでもそこへ行ってみたいと思うのです。

バリアフリーというのは、訪れた施設の心遣いの対応、つまり人的対応で全てが決まるのではないかと思います。完璧に福祉化されてひとりでも行ける場所も増えましたが、本当に納得できる所というのは、たくさんの人に手助けされて自分が見たい、自分が知りたいことを解かった時が、一番納得して帰って来るのです。

私共福祉協議会の方には、建物を作る際によく問い合わせが来ますが、私は公共施設は全部同じではないと思います。例えば福祉施設のように暮らしの拠点をそこに置いてしまう施設、研修施設のように何泊かして帰る滞在型の施設、そして通過型の施設の三種類に分けられると思います。しかし、この三種類の施設全てが、マニュアル等によって同じバリアフリーを作ってしまう恐れがあります。そうするととても費用がかかるのです。予算の関係で一番先にバリアフリー化の部分で削るのは、訪れて来る人に対する配慮が後回しになったということでしょう。車椅子用のトイレ一つ作るのに、何百万もかけなくてできるはずですが、ただそれはそこに関わる人、働く人、住んでいる人、それを利用している人、その人達の考え方で、変わってくるのではないのでしょうか。この部分が福祉化の進まない大きな原因だと思います。

#### ■講演2 「博物館のバリアフリー計画」

國學院大學文学部助手 山本哲也氏

平成10年初めに、神奈川県立生命の星・地球博物館の濱田隆士館長がユニバーサル・ミュージアムと言う言葉を提唱しました。ユニバーサル・ミュージアムとは、いわゆる“しょうがい者”といわれる方も含めた全ての人の博物館であり、今後積極的に受け入れられるべき言葉だと考えています。福祉の世界では、最近バリアフリーデザインという考え方から、ユニバーサルデザインという表現が出ています。ユニバーサルデザインとバリアフリーを比較する時に分かりやすく説明する方法として、例えば段差があるからスロープを作るという考え方がバリアフリーであり、新しい建物を作るときに最初から段差を作らないという考え方がユニバーサルデザインです。しかし、既存の建物がある場合は、それを何らかの形でいろんな人に対応させていくことになりますから、やはりバリアフリーという考え方は、今しばらくは必要であろうと思います。

平成7年版「障害者白書」によると、バリアフリーという考え方を4つに分けて進めるべきだと書いてあります。文化・情報面の障害(白書では3番目)、物理的障害(白書では1番目)、制度上の障害(白書では2番目)、そして最後に意識上の障害と分けられています。

ここで、実際に博物館におけるバリアフリー化を考えていく前に日本の「障害者観」について少し触れておこうと思います。日本の「障害者観」は、1981年の国際しょうがい者年以降急速に変化

したと思います。しかしそれが正しく理解されているかは、疑問に思われることがあります。例えば点字ブロックですが、実は原則として黄色がいいと言われていました。しかし実際はそうでない事例がいくつもあります。点字ブロックとは、全盲の人の為だけではなく、いわゆる弱視者の為のものでもあります。弱視者にとって判別の容易な色、それが黄色なのです。ですから例えば美観を損ねるというだけで点字ブロックの色を周りと同じにしてしまうのは、「心の美観」を損ねることになると思います。バリアフリー施設を行うには、「心の美観」を損ねない配慮が必要です。

さて、実際にバリアフリー化を考える上で、先ほどあげました4つの視点に分けて考えて行こうと思います。

まず文化・情報面の障壁についてですが、博物館とは、収集・保管、調査研究、展示・教育普及活動など様々な機能を持っています。その中の重要な機能の1つである展示をどうしていくかということが重要になってくる訳です。最近では、触れる展示というものが非常に多く試みられるようになってきました。それと同じように触覚は勿論、例えば味覚とか、嗅覚とか平衡感覚とかいろんな感覚に訴える展示が、出来ると思うのです。色々な試みがこれから成されるべきじゃないかと思えます。そうすれば、どこかの器官にしょうがいを持っていても、みんなが同じように情報を享受できる場が作り出されていくのではないかと思うのです。触れるにしてもただ触れるだけではなく、その材質感ですとか重量感というものを感じてもらうとか、そういったものを今後博物館の展示を行う上で考える必要があるのではないかと思います。

展示解説についてですが最近、音声ガイドとかがよくあります。非常に有効な手段だと思いますが、音声ガイドを使えない聴覚しょうがいの人はどうなのでしょう。解説1つ取るにしても、聴覚しょうがい者に対してはどうかとか、トータルな考え方でみて欲しいと思います。

次に物理的な障壁についてですが、この物理的



な障壁、要は建築面の事です。「障害者白書」には、エレベーターですとか自動ドアですとか、チェックするポイントが書かれています。これをそれぞれ見ていくべきだとは思いますが、やはりいろいろ考えるべき事があると思うのです。例えば身しょう者用のトイレを設置するにしても、可動式手すりにするか、固定式にするかで問題になると聞きますが、私はやはり可動式がよいのではと思います。様々な状況に対応するには、やはり可動式が必要だろうと考えています。例えば狭くてもそれに対応できる十分な介助が有ればいいかと言うと、やはり介助を受ける人の気持ちも考えなければいけません。いくら私たちが、介助法を熟知していても、やはりトイレのような特にプライベートなスペースでは、できる事なら1人で用足しが出来た方がいいと思うのです。

制度的障壁についてですが、入館料はよくしょうがい者の場合には免除が有り現状としては有効と思えますが、これは特別視していることになりかねません。中には、いわゆる健常者と同じようにしたい人もいるわけですから、色々な面での制度を考えるべきじゃないかと思うのです。

最後に意識上の障壁ですが、これは更に複雑な問題がでてくると思います。例えば、館内に「視覚障害者コーナー」などを設けた場合、やはり特別視されてしまうことになると思うのです。これは意識上のバリアを作っていることになると思うのです。勿論特別な場を用意することも、効を奏する場合がありますから、この辺りも博物館それぞれにあった方法を、編みだしていく必要があるでしょう。

忘れてはならないのが、ユニバーサル・ミュージアム、全ての人の為の博物館と言う事ですから、しょうがい者だけに必要な施設ではないと言うことです。特に今後高齢者に対しても有効な策であるのは、間違いない訳です。

バリアフリーそしてユニバーサルへと視点を広げていくためには、やはりそれなりにチェックリストを作るべきだと考えています。少しでもいいチェックリストを作っていくためには、色々な人が参加して、博物館単独ではなく協会レベルに持ち寄って整理する。そしてそれぞれの館に持ち帰ってチェックしてみる。やはりそういった試みが、今後多くなっていくべきじゃないかと思うのです。博物館世界全体が、そうならないと本当のユニバーサル・ミュージアムは、確立できないと考えています。

## 平成10年度学芸職員部会の活動から

その地域で地道な活動を実施している人の生の声を聞きたい。そのようなことから研修テーマを「地域学のススメ」としたのは函館市の研修会からです。これには布石があり、何年か前に十勝管内上士幌町で開催された学芸職員研修会の在り方でした。十勝大百科事典を作りあげた人たちの地についての活動に裏付けられた、それぞれの報告がテーマ設定への方向付けがなされました。数年間続いた生涯学習社会における博物館の在り方は延々と続く課題ではないでしょうか。

10年度の研修会は平成10年9月3～4日の二日間、十勝管内足寄町で開催されました。テーマは「地域学のススメ—十勝博物誌—」で、十勝の自然と歴史から見た北海道をサブテーマに地史(藤山広武さん)、自然(池田亨嘉さん)、開拓前史(後藤秀彦さん)、開拓(井上寿さん)の4つの分野からそれぞれ研究、事例報告を得ました。二日目には足寄動物化石博物館の澤村寛さんによる足寄動物化石博物館開館までの報告がありました。研修

会の内容については学芸職員部会ニュース57号で石狩市教育委員会の志賀健司さんが触れているので省略するが、分野の異なる学芸員が一堂に会して発表し、議論する場がもっと欲しい気もします。志賀さんが言う「ごちゃまぜの研究」もときには必要なのかも知れません。

学芸職員部会ニュース56～57の発行がなされた。編集者が事務局から利尻町立博物館の西谷榮治さんに変更し紙面の充実が図られるようになりました。地域の話や情報、取り組んでいる研究や活動、日ごろ感じていること等々紙面を飾る材料は豊富にあるように思えます。

かねてより懸案でありました、博物館ガイドブックにつきましては最終校正への詰めを行っております。多方面に互にご迷惑をお掛けいたしておりますが、何とかカタチにと奮闘しております。ご協力下さいました方々のご苦勞に報いるためにも努力しておりますが、いくつか整理しなければならないことがあります。もうしばらくのご猶予をお与え下さい。

(学芸職員部会事務局 矢吹俊男)

## 日本動物園水族館協会北海道ブロック 秋季飼育技術者研究会報告

道内13の動物園や水族館で組織される社団法人日本動物園水族館協会北海道ブロックの平成10年度秋季飼育技術者研究会が、室蘭市において開催されましたのでその概要をお知らせいたします。

- 日時 平成10年10月27日(火)、28日(水)
- 場所 室蘭市 エスカル室蘭
- 参加者 21名(全園館参加)
- 研究発表演題

1. レッサーパンダの繁殖・経過について  
深坂 勉(旭川)
2. 水槽内でふ化したホテイウオの飼育経過  
坂口 輝雄(室蘭)
3. 円山動物園における過去25年間のトナカイの繁殖経過  
柏 潤 幸治(円山)
4. ペンギン館新設について(新施設紹介)  
桑山 未来(ニクス)
5. 最近5年間の分離金の薬剤耐性状況について  
合田 克己(クマ牧場)
6. カラカル(*Felis caracal*)の人工哺育について

美原 嘉之(円山)

7. プラスチック製擬卵の作成について

川口 恵(小樽)

8. シマフクロウの人工孵化および育雛通過について  
井上 健二(釧路)

以上の8題について、動物園、水族館の枠を越えて活発な質疑応答がなされた。

承り・懇談事項については、事前に各園館に照会し、次の6題が提出されました。1. 博物館に相当する施設の取扱いについて 2. 海獣類の飼料について 3. 各園館で開催し好評を得た特別展について 4. 動物や魚の食欲減退における対処方法について 5. 寄贈生物の対処方法について 6. 1トン前後の小型水槽(移動式)のろ過装置について

これらについて、意見交換、協議が行われ今後の業務の参考になるものでした。

(飼育技術者研究会幹事 円山動物園 白澤昌彦)

## 北海道青少年科学館 連絡協議会の活動について

本年度の総会兼第1回目館長会議を4月に厚岸町海事記念館で開催いたしました。事業報告、新年度の事業計画等を協議し、苫小牧市科学センター菅原章介さん(15年)室蘭市青少年科学館中谷義男さん(8年)同じく谷藤一広さん(8年)を永年勤続・功労者として表彰を行いました。視察としては、国泰寺跡(国指定史跡)、環境庁の厚岸水鳥観察館などを見学しました。水鳥観察館では、別寒辺牛川沿いに生息する丹頂鶴を観察するなどたいへん有意義な研修となりました。10月には、第34回職員研修会を岩見沢郷土科学館で開催し、実技研修として、同科学館が北電岩見沢支店と共催している「熱気球づくり」に挑戦しました。2人ペアで協力しながら作るこの気球は、親子や友達同士のコミュニケーションが図れる良い事業でした。参加した職員は短時間で製作し、全員が天井まで高く上がるなど素晴らしい出来映えでした。情報交換では、本年度の事業取組状況を各館から発表しあい有意義な研修となりました。視察研修では

同市の自治体ネットワークセンターのマルチメディアホールなど情報先端の取り組みなどを見学しました。また、渡り鳥の飛来地で有名な美唄「宮島沼」で南下途中のまがなどを間近に観察することができました。10月末には第2回目の館長会議を道立オホーツク流水科学センターで開催し、3月末には第3回目の館長会議を札幌市で開催して本年度の全事業を終了する予定であります。  
(北海道青少年科学館連絡協議会 会長 北川邦弘)



職員研修会「熱気球づくり」

## 平成10年度北海道美術館 学芸員研究協議会報告

平成10年度の総会・研究協議会が2月25日、26日の両日、道立近代美術館で開かれた。昨年、釧路芸術館が開館し、また今年の秋には共和町に西村計雄記念美術館のオープンが予定されている。こうしたことから会員数が増加して51名となった。

今回の研究協議のテーマは「美術館と地域の美術」。参加者は43名。美術館が地域の美術と向き合うのは当然のことではあるが、それゆえについ

見逃されがちなテーマである。現在、道内の美術館は約20館、それぞれに地域の美術とかかわってきたが、そうした経緯を踏まえ、あらためて課題と可能性を探ろうという趣旨であった。内容は以下のとおりである。

### 第1日目

【特別講和】「地域の創造活動と美術館—〈札幌アヴァンギャルドの潮流〉展を中心に」市立小樽美術館長 吉田豪介氏

【事例報告】芸術の森美術館、鹿追町神田日勝記念館

### 第2日目

【特別講和】「北海道の美術・私見」画家・札幌大谷短期大学名誉教授 小谷博貞氏

質疑、討議で話題の中心になったのは、美術館の貸館事業であった。「貸館」という言葉のイメージから、そこには美術館の主体性が欠けているようにみえるが、地域の作家活動の活性化に寄与するための有効、かつ重要な事業であることを認識すれば、美術館と作家の協調関係のあり方など、そこにさまざまな方法論を見出すことができることを共通理解した。

(道美学芸研究幹事長 鈴木正實)



## 平成10年度の 郷土資料館活動について

知内町郷土資料館の今年度の事業内容について、展示と教育活動にわけて報告いたします。

展示活動では、[土の炎の芸術『かたちと色、様々な美』—現代陶磁器と縄文式土器—]というテーマのもとに企画展を開催しました。町内在住の収集家が所有している陶磁器と館所蔵の土器とを展示し、物のかたちと色の違いやその美しさを鑑賞することで、様式美を理解してもらうことが狙いでした。展示品は、町内の発掘調査で出土した縄文式土器のほか、人間国宝の今泉今右衛門を代表とする有田焼をはじめ、萩焼・薩摩焼・備前焼など伝統ある焼き物にくわえて北海道のこぶ志焼や池田満寿夫の焼き物などです。

また、第16回特別展として[—知内写真帳—「ふる里の山・川・海・ヒト」《笑顔輝く躍動の舞台》]を開催しました。これは、身近すぎてふだん意識していない町の現在の様子について、カメラレンズといういわば第三者の目をとおして眺めることにより、鑑賞者の郷土にたいする新たな発見があることを期待して開催しました。

特別展の開催にあわせて、[ミュージアム・コンサート part 3 一声の魅力—ソプラノの夕べ]と銘うち、なにかと近寄りがたいクラシック音楽のそれも声楽について、人の生の声の素晴らしさや魅力を楽しみながら理解できるような音楽会を開催しました。ソプラノの魅力やオペラを聴くための入門編になるような歌の選曲とともにピアノの独奏もおこないました。

教育活動では、小学生から一般までを対象に、知的好奇心を刺激し想像力を高めるための事業として、昭和60(1985)から「みて、きいて、ふれて、考える」をモットーに「ふれあい体験塾」を開催しています。今年度は、62名の入塾がありました。4月から翌年の3月までのあいだに、森林生態観察会や水生生物調査、星空観察会、ふる里再発見の旅、蕎麦作り、メ縄作り、伝承遊びなど「観察」「工作」「考察」に配慮した講座を20回予定しています。

今年度は、中学生に重点的に呼びかけるためシニアの部を設けたところ、11名が参加してくれましたので、上記の事業とは別に、砂金掘りや遺跡の体験発掘、芸術観賞会などのメニューを取り入れて実施しています。

(知内町郷土資料館 学芸員 高橋豊彦)

## 等澗院文書第2集 第2巻「蝦夷地寺院御取建住職記」解説書発刊

様似町にある蝦夷3官寺の一つ等澗院は、江戸時代後期幕府により蝦夷地入りした武士らを弔う寺院が必要となり、有珠の善光寺、厚岸の国泰寺とともに文化元年(1803年)に建立が決定され、文化3年(1806年)に完成。その筆頭寺として、北海道では由緒ある寺院のひとつとなっています。

当院には、建立の際からの薬師如来立像が現存しているほか、古文書が残されています。この文書は、住職記録13巻と「什物帳」「霊簿」「寺禄通減通知書」の16店あり、今回はその内の住職記の第2巻を解説発刊いたしました。

さて、この度の「蝦夷地寺院御取建住職記」と題された本巻は、享和3年(1803)11月8日、寺澗院の本山・寛永寺の執当・円覚院が、寺社奉行・脇坂安董に呼び出され、蝦夷地に建立する寺院の住職を人選するよう達しがあったことから書き起こされています。そして、住職の選任、寺号の決定、手当金の決定、将軍御目見え、等澗院開山・秀暁の江戸出発、様似到着までの経過が、寺社奉

行と、円覚院および等澗院との間のやりとりを「達し」「書付」などの形で綴られており、等澗院創建の状況を知ることができます。

この解説作業は平成9年7月、近世北海道史研究に寄与し、町民が郷土の歴史を理解し、更には歴史、文化への関心を高めることを目的とし、等澗院文書編さん会を設立し、草書体に詳しい上榎忠夫氏、渡辺満男氏、郷土史を研究されている森勇二氏の3名の委員により進めております。本書は1部1,500円(税別)で販売しております。詳しくは様似町教育委員会社会研究課まで

(様似町教育委員会社会教育係長 寺井直樹)



第2巻 蝦夷地寺院御取建住職記

**名寄市北国博物館企画展** (平成10.1.19~27)  
**「郵便切手にみる明治・大正・昭和・平成」**  
 ～瀧川コレクション～

「切手は文化の縮小された世界」と言うそうですが、その世界に魅せられた人は少なくありません。本展の資料提供者の瀧川忠氏(富良野市山辺小学校長)もそのおひとりです。切手収集歴が50年近くになり、今回は約10万点を越えるコレクションの中から、3,000点を展示いただきました。

名寄市も平成12年で開拓100年を迎える事から、時代を背景とした切手の移り変わりをテーマとしました。構成は前半を年代を追い普通切手と各種記念切手の色々。後半はスタンプの押された各種郵便、戦争中の郵便、事故・災害での郵便などをコーナーごとに展示しました。

特色ある展示物では、近世の初期の手彫り切手には職人の個性が表われ、近代の印刷技術による単色から多色印刷への流れが伺えます。

戦争に関わる郵便では、主に太平洋戦争のものです。軍事郵便はじめ検閲印や検閲免除印の押された郵便物には歴史を感じるものがあります。ま

た戦争債券や軍票と呼ばれた軍用手票もあり、戦争費用調達之苦勞がしのばれます。

色々な事故、災害の郵便では「災害」のスタンプが押された郵便物が無料である事をスタンプが押された郵便物が無料である事を知りました。奥尻島の地震災害、阪神大震災などはまだ記憶に新しいものです。特に、昭和29年の台風による洞爺丸遭難の際の郵便物は、事故後回収され函館郵便局で乾燥補修され、再配達されたものです。宛名のインクがにじみ、海難事故の悲惨さを見る者に伝える資料となっています。

(名寄市北国博物館 鈴木邦輝)



企画展風景

**町民サロンJRY**

さっきから、中年のご婦人と館長が昔の歌を口ずさんでいる。

「母が昔の唱歌を見たいというんです。」

この方の母親は92才。ほとんど独学で字を覚えたとのこと。ふと、子ども時代に聞いた唱歌を思い出し、歌詞を知りたいというので探しているのだという。整理を終えたばかりの大正時代の教科書を持ってきて、今頁を繰っている所だ。

「そうそう、この歌なら知っていると思いますよ。ああ、ここへ来てよかった。」

不思議なことに、館長と話すお客さんはなかなか帰らない。思い出話や子育て、果ては文明評にまで発展して、すっきりしてから帰っていく。

「博物館のサロン化」。これは、博物館を町民に近づけるためにと館長が常々言っていること。それを意識している若い私の所へも、多くの若者が集まってくれるようになった。

畑作專業の青年が、インターネットの講習会を聞きたいと相談に来る。高校の先生が博物館を使っ

た授業の話を持ち込んでくる。が、彼等は、いつのまにか肝心の相談ごとを忘れて、今かかえている問題などを話している。残業して明かりがついていると、さらに多くの客がやってくる。常連も出来た。昼間の仕事を終えた人々が、館の明かりを見つけて、ふと寄ってみようと思う。そんな雰囲気が出来始めているんだなあとと思う。閉館してもしばらく帰る気にならなくなったのも、寄ってくださる町の方を期待してのことかもしれない。

「そうですか、それなら書いてみますか。」

「書いてくださいよ。いい考えなんだから。」

館長の娘さんと同じぐらいの歳だという女性が、「りんごの歴史」をまとめることができなくて、もう止めたいといいにきたのに、話し込んでいるうちにもう一度やってみようと言うことになったらしい。

非常勤館長1名、学芸員1名、臨時職員2名のこの町の博物館でどこまでやれるか。

来館の町民の満足した顔が私たちを勇気づける。(上湧別町立博物館上湧別町ふるさと館JRY

学芸員 中島一之)

## 帯広百年記念館 アイヌ文化セミナー開催

帯広市では平成7年度より「ウタリ総合福祉推進計画」をスタートさせ、アイヌ民族に関して福祉や教育などさまざまな分野での取り組みをおこなっています。これに基づいて帯広百年記念館でもアイヌ文化に関わる体験教室や講演会、シンポジウムなどの事業を展開しています。

こうした動きのなか、今年度の事業のひとつとして、平成11年1月17日に「平成10年度帯広百年記念館アイヌ文化セミナー ―アイヌ民族の文化と歴史を学ぶ―」を開催しました。このセミナーは、多くの方々にアイヌ民族の文化や歴史について理解を深めていただくため一昨年から行われています。

今年度は、講師にアイヌ民族博物館の秋野茂樹氏、千葉大学の志賀雪糊氏、それに根室市博物館開設準備室の川上淳氏をお迎えし、それぞれ「アイヌの霊送り ―イオマンテを中心に―」、「アイヌの物語に登場するカムイ ―ヒグマのさまざまな姿―」、「北千島アイヌの歴史」というタイトル

のご講演をいただきました。

当日は十勝館内をはじめ、全道から80名を超える参加者があり、皆熱心に聞き入っていました。

なお、年度内にこのセミナーの講義録を刊行する予定ですので、ご希望の方は帯広百年記念館までお問い合わせください。

(帯広百年記念館 学芸員 内田 祐一)



帯広百年記念館アイヌ文化セミナー

## 点 → 線 → 面

### ～しりべしミュージアムロードのネットワーク～

1995年、「地域文化の振興及び地域経済の活性化に資する」ことを目的として、ニセコ山系の点在する美術館・文学館（岩内町「木田金次郎美術館」・「荒井記念美術館」、ニセコ町「有島記念館」、真狩村「国松登ギャラリー」）を結んだ「しりべしミュージアムロード推進協議会」がスタートした。以来、バスツアーが開催されたり、マスコミに取り上げられるなど、とくに『地域経済の活性化』の側面が注目されてきた。昨年10月、そのネットワークに新しい顔が加わった。これによって、より充実した「周遊ルート」になることが期待されている。

新たに加盟したのは、ともにこの秋開館予定の「西村計雄記念美術館」（共和町）と「(仮称)小川原脩記念美術館」（倶知安町）である。「西村計雄記念美術館」は、共和町出身でパリで活躍した西村計雄画伯から自作絵画の寄贈を受け、設置されることとなった。訪れる人が互いに交流し、学びあい、楽しめる場をめざす。「小川原脩記念美術

館」は、倶知安町在住の小川原脩画伯の作品を中核とした美術館で、存在感のある美術館をめざしている。住民との対話を図ったり、学校との連携を進めている。

それぞれはひとつの『点』である美術館や博物館が『線』で結ばれた。今後は、いかにこのネットワークを活かし、後志という『面』として活動を行っていくことができるか、が課題となろう。

観光による「地域経済の活性化」という側面であれば、阪神間の美術館・博物館20館でつくるネットワークの試みのように、共同のホームページの開設やシャトルバスの運行など、観光客の利便を図るための多様なプランが考えられる。

「地域文化の振興」を図る上では、職員や地域住民どうしの交流・協力をさらに推進することがこのネットワークの大きな意義となろう。30館ほどの美術館・博物館がある後志、名実ともに「芸術・文化が後志の新しい顔」になるよう、早急に取り組んでいきたい課題である。

(共和町教育委員会 学芸員 南部亜矢子)



## 館 園 紹 介

### 札幌市博物館計画

札幌市では現在博物館計画が進行中である(表一1)。平成10年12月には、各方面の専門家や市民からなる「札幌市博物館建設準備委員会」により『札幌市博物館基本計画』が札幌市長に提出された。それによると、札幌市の博物館は「(中略)札幌とその周辺地域の自然、環境、歴史、文化等を対象とし、自然史学(動物、植物、地質、岩石鉱物、古生物など)を基盤に、人文社会科学等の関連諸科学を有機的に関連づけ、札幌とその周辺地域の自然の成り立ちと、そこにおける自然と人の関わりを総合的に探求する自然系統合博物館とする……」とあり、その使命として「(中略)札幌という地域から北海道、日本、北東アジアと、より広い領域を視野に入れた活動を行い、身近な地域をきっかけに地球規模の自然と人の関わり方を探求していく(後略)」と定義している。総論としては理想的な内容が盛り込まれた。後は、各論をいかに仕上げ、実行していくかという問題が残されるのみである。

日本はこれまでに経験したことのない経済危機の只中にあり、当然、自治体にも厳しい対応が求められている。そんな中での博物館計画である。施策の優先順位を云々する声も聞こえてくる。しかし、どんな状況であっても自然界のしくみに心動かし、発見の喜びに胸打つことを必要としている子どもたちはいる。いや、こんな時だからこそすべての人に自然の実相を体で感じることでできる博物館という時空が不可欠なのである。

札幌市の博物館には設立の背景となる既存の資料がない。ゆえに、資料の収集保存が現段階の最大の課題である。市では97年に旧市立札幌病院の5、6階を収蔵庫として整備し、各分野別に資料の収蔵および保存処理を可能とする場を設けたほか、一部は実習室として整備し、市民を対象に体

験学習を実施してきた。これまで実施した事業(表一1)では、概ね4.7(5段階評価)を上回る評価を市民から得ている。これからの札幌市の博物館活動は満足度の高い事業を多彩に展開しながら、質の高い資料の収集を継続的に実施することで、市民とともに真に地域に根差した自然誌の体系を綴っていくことに主眼を置きたい。札幌市の博物館は市民とともに発見の「喜び」、「楽しみ」、「感動」を分かち合いながら作り上げる協働事業の集積なのである。

(札幌市文化局 学芸員 古沢 仁)

表一1 札幌市博物館計画の経緯と実施事業

96年4月	「北・その自然と人」を基本テーマとする自然系総合博物館を提言(札幌市博物館基本構想委員会)
7月	博物館建設準備委員会設置
97年1月	市民12,000人対象に博物館に関する市政モニター調査
2月	道内博物館学芸員との懇談
3月	仮収蔵庫の整備(旧市立病院:リンケージプラザ5、6階)
8月	「化石と地質の体験学習会」親子ペア23組46名
98年2月	市内小・中学校の理科、社会の教員1,700名対象に学校教育と博物館に関するアンケート調査
2月	道内博物館学芸員との懇談(2回目)
6月	第2回「化石と地質の体験学習会」小学4~6年生40名
9月	博物館フォーラム開催(参加:180名) テーマ「北・その自然と人—北海道における人と文化の源流を探る」
9月	第1回ロビー展開催「札幌のおいたちを探るタイムトラベル」
12月	『札幌市博物館基本計画(提言)』の提出(札幌市博物館建設準備委員会)
99年1月	第3回家族体験学習会「アンモナイトの標本づくり」15家族40名



家族体験学習会で実施されたアンモナイト標本づくり

## 館・園の主な展覧会と普及事業

(4月～6月)

## 石狩

- 北海道開拓記念館 (011-898-0456)  
5.19～7.7 特別展「新弥生紀行」  
4.4～7.11 体験学習「弥生文化のころの北海道一統縄文文化のくらし」
- 江別市セラミックアートセンタ (011-385-1004)  
4.29～5.5 使って楽しむ創作食器展「ティータイムの風景」、6月25日から 展覧会「近代陶芸の巨匠 河井寛次郎の世界」

## 渡島

- 戸井町郷土館 (0138-82-2273)  
6月「歴史の道探検」

## 松山

- 熊石町歴史記念館 (01398-2-2200)  
4.6～18 写真展「北海道仁科会写真展」

## 後志

- 小樽市博物館 (0134-33-2439)  
4.25 考古学講座1「後志の歴史」、  
6.19 北海道近代史講座1「石炭と小樽」

## 空知

- 美明市郷土資料館 (01266-2-1110)  
4.10～5.9 展示会「銘石展」、  
6.4～6.27 展示会「写真展」
- 三笠市立博物館 (01267-6-7545)  
5月 第1回自然観察講座

## 上川

- 下川町ふるさと交流館 (01655-4-2627)  
5月 第13回企画展「西町1遺跡発掘展」
- 中川町郷土資料館 (01656-7-2419)  
4月25日から 常設展「中川町から発見された化石動物群」

## 留萌

- 金田心象書道美術館 (01632-5-2720)  
5月以降 生涯学習講座「書道教室」

## 胆振

- 苫小牧市博物館 (0144-35-2550)  
5.1～6.6 第2回企画展「新収蔵資料展」、  
6.12「勇払原野の蝶～ふるさとを訪ねて～」
- 室蘭市民俗資料館 (0143-59-4922)  
6月中旬 講座「古武道に親しむ」

## 十勝

- 本別町歴史民俗資料館 (01562-2-2141)  
6～10月 体験学習「ソバづくり再現講座」

- 帯広市百年記念館 (0155-24-5352)  
6.6 自然観察会「アイヌ語で自然観察」、  
6.19 講座「北海道にヒトが来たころ」

## 平成11年度

## 第38回北海道博物館大会

- テーマ：(仮)地域産業と博物館  
日程：平成11年7月1日(木)、2日(金)  
会場：江別市民会館  
主催：北海道博物館協会、江別市、江別市教育委員会、日本博物館協会北海道支部

## ■事務局日誌 (平成10年10月1日～平成11年3月)

## ■平成10年

- 10月9日 平成10年度生涯学習振興奨励補助金交付決定
- 10月13日 第13回北方民族文化シンポジウム後援
- 10月15日 「道博協ニュース」第64号発行
- 10月20日 「道博協ニュース」第64号および平成10年度加盟館園等の現況調査書送付
- 10月23日 第38回北海道博物館大会補助金交付申請
- 10月27～28日 平成10年度ミュージアム・マネジメント研修会開催(北見市)
- 10月28日 平成10年度第2回役員会(北見市)
- 11月6日 平成10年度ミュージアム・マネジメント研修会終了の礼状送付
- 12月11日 第37回北海道博物館大会(浦河大会)報告書送付
- 12月15日 平成10年度生涯学習推進事業(ミュージアム・マネジメント研修会)補助金確定
- 12月18日 平成10年度博物館・郷土資料館経営専門研修講座後援

## ■平成11年

- 1月12日 「道博協ニュース」第65号の執筆依頼
- 1月29日 「博物館資料及び写真資料のデジタル化とコンピューター処理」後援
- 3月9日 平成11年度の主な展覧会および普及事業計画の調査書送付
- 3月10日 平成11年度ミュージアム・マネジメント研修会事務打ち合わせ平川事務局次長出席(函館)
- 3月26日 平成10年度第3回役員会